



特集2

雷様をめぐる民俗

とちぎ未来大使 柏村 祐司

近年、宇都宮市を雷都といい、また、宇都宮商工会議所では、市内で作られる逸品を商品化し「雷都物語」として販売に努めている。雷都とは、宇都宮市が全国的に雷が多い所から付けられた名である。

雷の発生

〈夏季に雷が多い訳〉

雷の発生回数を夏季に限って言えば、栃木県は最も多く、宇都宮市は県庁所在地の中で全国一を数える。しかも夏季の雷は強力で、その上に突風や降電（合わせて雷嵐^{らいあん}）といい、水嵐と書くこともある）を伴うことが多く、それらが極めて印象深いところから雷県^{らいけん}とか雷都の名が生まれた。

栃木県が夏季に雷が多いのは、北西部に高山が連なり、その上に夏季の強い日射を受け、かつ南からの風とよって山沿いに強い上昇気流が起きるからである。

雷の二面性

〈被害と恵みをもたらす雷〉

落雷は、人々を恐怖に陥れ、突風や降電は、時に被害をもたらす。こうしたこと

から雷は厄介なものとの印象が強いが、一方、日照りが続く夏季の雨は、農作物にとって恵みをもたらす慈雨となる。宇都宮あたりでは、どちらかといえば、雨の恵みの方が大きい。そうしたことから「雷神は作神だ」の言葉が聞かれる。雷都物語の添え書きに「天の恵みが生み出した雷都の逸品」とある。宇都宮商工会議所も雷は、恵みをもたらす神様と意識していた。また、雷を「雷さま」と敬愛や親しみを込めていつている。恵みを与えてくれるものとの意識が強かったからに他ならない。

雷発生時における落雷除け

〈雷県ならではの多彩な風習〉

夏季に強力な雷が発生する栃木県では、



粥橋の先に小豆粥をつける

さまざまな落雷除けの風習が伝えられる。中でも多いのが線香や小正月に小豆粥を食べる際に用いた粥箸など物を燃やす、蚊帳などに、節分の残り豆を食べる、クワバラなどと唱えらるという風習である。また、線香を燃やすといった方法だけではなく、線香を燃やし、カヤの中に入り、クワバラ・クワバラなどと唱えらるという等いくつかの風習が組み合わされて行われる。

この中でクワバラと唱えることについては、那須烏山市に「雷神が誤って天から桑畑に落ち人間に助けられ際に、クワバラといえば落雷をしないと雷神が約束したことから、雷の際に落雷除けにクワバラというようになった」との話が伝えられる。

強い雷の予測

〈フジニシとサンバイ〉

屋外で農作業などをしていて雷にあうことはよくある。この時に、どの方向からやってくる雷が強いのか、的確な判断を即座にすることが肝心である。強い雷の予測について、宇都宮あたりから南の県南西部地域では、フジニシとかサンバイという

雷電様に託す

〈雷嵐よけと雨乞い〉

栃木県は、雷県に相応しく雷神信仰が盛んである。県内には、二百社を超える雷神社があると述べたが、雷神社の有無にかかわらず、各地では霊験あらたかな雷神社への信仰が篤い。なかでも群馬県板倉雷神社は、思川流域の人々から篤く信仰され、親しみを込めて板倉の雷電様と呼ばれている。この雷神社を信仰する集団を雷電講という。

板倉雷神社の信仰の中心は、雷嵐除け、ならびに雨乞いである。思川流域では、麻、夕顔、大麦・小麦の栽培が盛んに行われ、いずれも全国有数の生産量を誇り貴重な現金収入源となった。ところが麻や夕顔は、雷嵐の被害にあいやすく、雷嵐除け信仰が強い。一方、思川水系は水源が浅く、

流域の水田地帯では梅雨時に十分な雨が降らないと日照りの害にあいやすく、一転して雷神社への雨乞い信仰が盛んとなったのである。

市内幕田町では、古くから板倉雷神社への信仰が篤く今なお雷電講が存続する。幕田は北・南・東の三地区からなるが、現在でも北と南では雷電講が続けられ、各地区二名ずつの世話人が、正月明けに板倉雷神社へ参拝する習わしとなっている。世話人は雷嵐除け等の祈願をし、各集落二枚ずつお札を受け、帰宅後に地区内それぞれ二カ所に竹竿の先にお札を挟み立てる。おかげで雷様の被害が少ないという。



集落内に突き立てられた雷神社のお札

平出の雷電様

〈勇壮な梵天上げの祭り〉

平出の平出神社は、通称、平出の雷神社といわれる。宇都宮市内や芳賀町などの梨栽培農家や稲作農家などから雷嵐除けや雨乞い信仰を受けて来た神社である。

七月下旬の祭礼は、別名梵天祭りと親

言葉が聞かれる。

フジニシとは、富士山が見える西の方向、つまり南西方向という意味で、その方向からやってくる雷は、「強力で雷の移動も早いから気をつける」というわけである。また、フジニシの方向からやってくる雷雲をサンバイともいう。サンバイとは「ご飯三杯」のことで三杯食べ終わらないうちにやってくることも、「稲三把」のことで稲三把刈り終わらないうちにやってくるともいわれる。

こうした強力な雷の予測の一方、大事に至らない雷についての予測も聞かれる。宇都宮市東部から芳賀地域にかけてでは「東ライサマと女の腕まくりは怖くない」との言葉が聞かれる。東ライサマとは、筑波山方面に発生した雷雲をいい、そうした雷雲は東に移動してしまうので大事には至らないというわけである。

格は低いが親しみある雷神社

〈地域の暮らしに密着〉

戦前、全国の神社は、官幣社とか国幣社・県社・郷社・村社・それに無格社等と格付けがされた。栃木県内には、二百社を超える雷神社があるがほとんどは無格社で、最高は郷社で那須烏山市月次加茂神社が唯一である。村社でさえ数十数社と少なく、宇都宮市内では細谷の雷神社社だけである。このように雷神社の格は、総じて低かったが、創建の歴史が新しく、小集落で祀ったものが多く、氏子が少ないことが理由のようであった。

上砥上には、集落の北の外れに雷神神社



梵天を激しく揺さぶりながら拝殿に向かう

しまれている。梵天を屈強な大人たちが担ぎ、先端を激しく揺さぶりながら参道を行きつ戻りつする。雷神を祀る神社に相應しい勇壮な梵天の奉納である。一・三度往復した後には拝殿前で一同拝礼し、最後にご神木に梵天を縛り付け奉納は終わりとなる。その後、氏子たちが供えた餅や菓子などがまかれるが、この時はやはり多くの人でにぎわう。雷神神社のかつてにぎわいを彷彿とさせる。

雷神神社は台地の東の外れにあり、崖下に霊泉があった。日照りには多くの農民がお水借りにやってきましたという。ところが台地上に住宅や工場ができるとう泉の水が枯れてしまった。今では昔ほどの参拝者はいなくなつたというが、代わって電気関係者の落雷除けの祈願・参拝が多くなったという。時代の変化に應じ信仰内容は変わる。雷神神社の霊験健在なりといったところである。



写真上/石の祠の雷神神社の回りを周回する氏子たち
写真下/板倉の雷神神社